

PHD LETTER 132

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 2016.7

PHD 運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和 (Peace) と健康 (Health) を担う人づくり (Human Development) をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981年からはじまりました。

発行：公益財団法人PHD協会
住所：〒650-0003 神戸市中央区山本通4丁目2-12 山手タワーズ601
TEL：078-414-7750 FAX：078-414-7611
E-mail：info@phd-kobe.org
URL：http://www.phd-kobe.org
郵便振替口座：公益財団法人PHD協会 01110-6-29688



「医療従事者になって村を守りたい」
スリザナ・シャハ・タクリのはなし
PHD Movement vol.13 P.1-2

被災地ラジャバス村からやってきたスリザナさん。日本での目標を力強く語る。

大地震発生から一年余り

ネパール大地震被災者支援

「スリザナさんの招聘」復興への道を力強く歩む人の手助けをしたい。何十分の一かも知れないけれど、PHDができるささやかな、でもきつと大事な復興支援。

報告 ネパール大地震被災者支援関連

- ・2016年度支援テーマ「子ども支援」「収入創出」..... P.3-4
- ・2015年度復興支援報告..... P.5

目次	34期研修生紹介 P.6-8	ロータリー米山記念奨学会 P.13
	新職員紹介・2016年度国内研修生紹介 P.9-10	日々是東奔西走 P.13
	2016年度事業方針・計画 P.11	熊本地震とPHD協会 P.14
	PHD活動紹介 2016年3月～6月 P.12	フェアトレード商品の紹介 P.14



左/スリザナさん、近影。
右上/スリザナさんのお父さんが建てた家の写真。昨年の地震により全壊し、今は無い。
右下/トタン製の仮設住宅前のスリザナさんと家族。右より、本人、弟、妹、お母さん。



スリザナさんのお母さん。生活が大変な中、彼女を日本へ送り出してくれた。

PHD Movement vol.13

スリザナ・シャハ・タクリのはなし

ネパール大地震被災地ラジャバス村より招聘したスリザナさん

事務局長 坂西卓郎 = 文
～分かち合い実践録～

「そもそもこんな時に選考なんかしていいの？」

それが、昨年の6月の問いであった。地震は4月25日に発生。被災者の緊急救援も十分でない状況に加え、雨季が迫っていた。まずは仮設住宅の建設が急務となっていた時期であり、現地で救援活動に励んでいる方たちにさらなる負担を負わせたくはなかった。しかし、「いや、地震があったからこそ選考を行って欲しい。地震で疲弊している人たちに明るいニュースになるし、なによりも復興への道のりは長いものになる。日本で学んできたことを復興にも役立ててもらいたい」と返答を受け、実施を決断した。

スリザナさんとの出会い

選考地は今までも付き合いがあり、地震の被害も大きかったラジャバス村に決定し、選考を行った。

スリザナさんは選考では控え目な印象であったが、秘めた意思を感じる方だった。また苦学して高校を卒業したこと、家庭を支える役割を担っていることの内容から、忍耐、献身性は疑いの余地のないもので、尊敬の念を覚えられなかった。

ネパールにおける出稼ぎ

ネパールでは昨今、出稼ぎが急増しており、在ネパール日本国大使館発行の「図解ネパール2014」によると2012-13年度には41.6万人。100人に2人に割合になり、送金額はGDPで25.5%、つまり四分の一を占める。これらは大地震前の数字であり、地震によって観光業や農業が影響を受けた今、さらにその割合は増加していると思われる。その根拠として地震後、ネパール政府が海外への出稼ぎ者のためにフリーチケット、フリービザを発給していた時期があったことを加筆しておく。

スリザナのお父さんも出稼ぎへ

スリザナさんのお父さんも例に漏れず、中東ドバイへ5年、その後、マレーシアで1年働き、その稼ぎで立派な家を村に建てた。出稼ぎの是非はさておき出稼ぎの成功例と言えるだろう。

しかし、お父さんは帰国後、3ヶ月で亡くなってしまった。直接の因果関係は不明だが、傾向として出稼ぎは過酷な労働条件が多く、病気になる方も

少なくない。スリザナさん曰く「たくさん病院に行ったけど、最後まで何の病気わからなかった」ということだった。

お父さんが苦勞して出稼ぎで建てた家は、スリザナさんたち家族にとってはお父さんの形見とっていいものだったが、その家も地震で跡形もなく倒壊してしまった。その後、スリザナさんはしばらく畑に住み、その後、仮設を建てたそう。曰く「暑くて、寒く、雨の音もうるさい」とのこと。

お母さんの涙

その後、スリザナさんは朝早くから約4時間かけて水牛のための草刈り、家族の食事や農作業などを行い、夕方には再度同じ時間をかけて草刈りを行う生活を送る。妹と弟は学生で、その学費も必要。

「そんな一家の働き手でもあるスリザナさんを日本に連れてきてもいいのか」それが家庭訪問実施後の心配であった。

そのことをお母さんに尋ねると「確かにスリザナが居なくなると生活は大変です。でも、母として一生スリザナ

に草刈りだけをさせるのは忍びない。チャンスがあるなら日本に行かせてあげたい」と涙ながらに訴えた。その後、大変ではあるが、生計がなんとかなることが確認でき、招聘に踏み切った。

スリザナさんの思い

表紙にも書いたように、医療従事者、助産師への想いのあるスリザナさん。最寄りのクリニックは歩いて4時間。村には簡易医療施設はあるが、医療従事者は居ない。そんな状況から地震後は大変だったと聞く。一方、小学校でボランティアで教えたりもしており、教育や保育にも興味がある。日本での研修を得て帰国後どのような活動を始めるのかはまだわからない。しかし、村の状況を誰よりもわかっているスリザナさんの思いを支えたいと思う。

PHDの本業である人材育成、たった一人の被災者を招くことしかできないが、先の長い復興への道のりだからこそ、点から始めることも大事だと信じて続けていきたい。ぜひご支援をお願いしたい。

2015年度研修生のその後 ゾンさんが教えてくれた「豊かさ」

坂西 卓郎 = 文

2015年度の研修生、それぞれ村に帰国し、がんばっているので報告する。

まず、ゾンさん（インドネシア/下写真/右）。3月に比較研修旅行でカンチさん、サンティダさんと一緒に彼の村に訪問。最終日には州都バダンで一泊。屋台で夕食を食べていると、料理を購入したゾンさんがふらっと居なくなる。気が付けば貧乏そうなホームレスの方にごはんをあげている。ゾンさん「私は村で貧乏の人」と本当に手持ちのお金がない様子だったが、そのなけなしのお金を「あの友達」と路上生活者の方に手渡していました。もちろん知り合いではない方に。同じ光景を別の場所でも。とてもさりげなく、自然にしていたので、もしかしたら私が見た2回以上あったかも。本当に心の豊かな人で、改めて「豊かさとは何か」を考えさせられました。そんなゾンさん、活動支援金で肉牛を購入し、「出稼ぎをしなくても自活できる村づくり」、家族と一緒に居られる生活に向け大きな一歩を踏み出しています。

「楽しい幼稚園づくり」を掲げたカンチさん（ネパール/下写真/左）はECDセンター（P3左コラム参照）と言われる就学前教育施設を開設するため奮闘中。3歳から5歳の教育のためのセンターで

今後普及効果も期待されており、また子どもの親の負担が減ることで、家族が復興のための収入創出プログラムへの参加促進も期待される。

「小さな図書館の建設」を目標にしたサンティダさん（ミャンマー/下写真/中央）はPHDの現地職員にもなり忙しい日々を送りながら図書館のための本を購入。着実に建設に向けて動き出している。

帰国報告会で発表したアクションプランを確実に実行している3人。今後にも強く期待したい。

*詳細は2015年度事業報告書に記載

PM131号の感想

PHDレターを送っていただきありがとうございます。

冒頭のゾンさんの記事すごく良かったです。初めて会った時から色々あった人なんだろうなあと思いつつ接して、でも私に見せてくれた笑顔はいつもいい笑顔でした。「年をとって周りに誰もいなくなったら絶対に村で一緒に暮らそう ずっと面倒見るから」と彼は私に何度も言いました。貧困の中なおこの懐の広さ 本気で行こうと思う時が今もあります。インドネシア語通訳 濱宏子さんより





PHD 協会は引き続きネパール大地震の被災者を支援します。

2016 年度復興テーマ「子ども支援」「収入創出」

ようやくネパール政府による本格的な恒久住宅建設支援が始まるなど、大地震からの復興は新たな段階に入っています。PHD 協会でも現地カウンターパートの NGO の SAGUN と協力して、被災地復興のために「子ども支援」と「収入創出」に焦点をあてて、プログラムを実施します。

坂西 卓郎=文

「子ども支援」

子どもたちの支援として
ECD センター（就学前幼児教育）
支援プログラム

2016 年度内に ECD センターをタクレ村の小学校に設立します。タクレ村は 2015 年度研修生のカンチさんの出身村で、彼女は現在 ECD センターの設立に向け、中心的役割を担っています。ECD センターは 3 歳から 5 歳までの子ども達の発育を支援する役割を担っている幼稚園のような施設です。地震で影響を受けた子どもたちのメンタルも含めたケアが期待されます。

さらに、ECD センターに子どもを昼間

預けることで、若い子どもを持つ家庭が現金収入に結びつく仕事に従事することも期待されています。

今後は他の地域にも、次第にこのプログラムは拡大していく予定であり、カンチさんの働きにかかる期待は大きいとのことです。

Mangal Janavijaya 小学校 再建プログラム

ネパール政府によると大地震で 12,000 以上の教室が全壊しました。使用不能になった学校は、危険を示す赤

いラベルが貼られたままで、なかなか再建が進んでいません。PHD 協会では、日本の個人の方のご支援を得て、小学校の再建を実施することにしました。半壊した小学校の一階部分を修繕し、4 つの教室を耐震構造にする予定です。この再建により 100 名以上の子どもたちが雨風を凌げ、かつ安全な教室で学ぶことができるようになります。

「収入創出」

収入創出のための
ヤギ 100 頭肥育プログラム

「ヤギ 100 頭肥育プログラム」はマンガルタール VDC* (973 世帯) での潜在的な所得創出活動を掘り起こすためのプログラムです。

マンガルタールの人にとって、ヤギの肥育は、昔から慣れ親しんできたものであり、収入創出も見込めます。しかし、貧しい被災世帯にはヤギを購入する資金がありませんでした。

そこで 2015 年 11 月、現地農民の代表と Ward Citizen Forum(WFC) のコーディネーターとの会議の中で、被災した貧しい世帯にヤギを貸し出すプロジェクトが発案されました。

PHD 協会はこの発案に応じ、SAGUN を通じて貧しい 100 世帯に、1 世帯あたりヤギ 1 匹を貸し出します。

SAGUN はこのプログラムの実施にあたって「集団的アプローチ」を行います。まず、農民たちをグループに組織、「ヤ

ギ畜産業」に関して、そのグループでトレーニングを受けてもらった後、ヤギを分配します。ヤギを貸し出した後も、任せっきりにするのではなく、技術的なアドバイスも含めた定期的なモニタリングが SAGUN によって行われます。受益者である農民たちは、こうして大きく育ったヤギを販売し、販売して得た金額の中から、利息を除いたローンを SAGUN に返済します。返済された資金は他の世帯にヤギを貸し出すための回転資金になり、循環していく予定です。

住民参加型による
5 年間の開発（復興）計画づくり

生計向上強化を目的とした計画づくりを住民と共に進めます。最初に計画づくりのための研修を地元の人たちの、要望に基づいて実施します。地域レベルでの計画づくりを積み上げ、VDC レベルの計画を策定します。SAGUN が技術

的な専門知識も提供することによって、住民自身の計画立案を促します。この住民主体の計画づくりの一連の流れは、地震によって引き起こされた、経済的・社会的な荒廃に対処し、村人の社会的・経済的状況に十分な変化を与えることが期待できます。

ピンタリ村農業協同組合
促進プログラム

ピンタリに設立された農業協同組合は今、その地域において地元の人々と政府の代理人の調整業務を活発に行っている存在感のある組合に成長しています。また、最寄りの大きな町であるドゥリケルとカトマンズの市場と協同組合のメンバーをつなぎ、収入創出の道を模索することに加えて、組合メンバーの能力向上のためのトレーニングを実施します。2014 年度研修生のムクさんは組合員であり、かつ SAGUN の職員として協同組合のサポートを定期的に行っています。

*VDC= 村落開発委員会



右/ヤギを育てるおばあさん。マンガルタール地域では、昔からヤギが飼われてきた。下/村でのミーティングの様子
村の人たち主体の計画づくりが行われる。



ネパール大地震被災者支援報告 (2015 年度)

2015 年 4 月 25 日、M7.8 の大地震が発生。PHD の研修生たちの居住地域も含む、ネパールの広範囲が甚大な被害を受けたため、PHD 協会として救援活動を実施することを決断し、2015 年度を通して被災者支援を実施しました。(詳細は 2015 年度事業報告書に記載)

八木 純二=文

緊急支援活動

地震発生後の 4 月 29 日から、5 月 23 日までで合計 4 回、神戸・元町で有志の方々とともに、街頭募金を行いました。募金総額は街頭だけで約 69 万円に達しました。これらの募金は、現地 NGO の SAGUN を通じて、テント、水や薬、食料などの緊急災害支援物資に購入に使用され、被災者に配布されました。

また、5 月中旬には坂西が被災地のガハテ村に入り、現地との協議の上、約 140 万円分のトタンと米、見舞金を配布しました。

復興支援活動

仮設住宅建設支援

マンガルタール地域

急場をしのぐための建設支援として、約 250 世帯に 15,000Rp (約 18,000 円) ずつを支援。また、PHD 元研修生が約 973 世帯を訪問し聞き取り調査を実施、また地域とも議論を重ね、最も困窮している 220 世帯を選出し、仮設住宅建設支援を行いました。この支援により、特に被災した貧困世帯に仮設住宅を供給することができまし

た。支援の過程で、関係者間での調整も上手くいき、全ての関係者から高評価を得たことが特筆するべき点です。

希望を紡ぐ大工と石工の

トレーニング マンガルタール地域

耐震構造を踏まえたモデル設計住宅を建設する大工 6 人と石工 7 人をトレーニングしました。このプロジェクトは今後高まる建設需要と政府の住宅建設支援策に対応できる地元の担い手を育てることも目的としています。

トレーニングは参加全員が無事修了し、住宅建設の促進と被災者の収入向上に結び付けました。

学校再建プロジェクト

マンガルタール地域

多くの学校の教室が全壊しており、子ども達は学校に行けない、もしくは青空教室での授業を余儀なくされていました。そこで同地域での学校再建のための調査を実施しました。2016 年度に地元 Mangal Janavijaya 小学校を再建します。



2016 年研修生スリザナさんの出身地ラジャバス村の倒壊した家屋。同村はとりわけ地震の被害が大きかった。

簡易水道プロジェクト

ガハテ村及び周辺

湧水の減少により、飲料水の減少に困っているガハテ村で、唯一水が湧いている水源から簡易水道を建設し、90 世帯に水を引きました。

元研修生助産師ランマヤがんばれ！

プロジェクト ガハテ村及び周辺

被災地での出産や震災に伴う怪我や疾病に対応するため、ネパール帰国後に助産師となった研修生ランマヤ・タマンさんを雇用しました。

ランマヤさんは被災地において助産師として、地域のクリニックで医療に 1 年間従事しました。このクリニックでは 1 年間で出産が 142 件あり、出産関連の検診と治療を 961 人が受け、1,203 人が病気や怪我の治療を受けました。



タラタジャラン村から 5 人目の研修生となるリンダさんです。エリザさん (11 年度) とは互いに 2 歳の子どもを持つママ友で、エリザさんが取り組んでいる村の幼稚園でボランティアのお手伝いしています。また母子保健活動に取り組んでおり、月 1 回の健康診断では子どもたちの体重を量る係をしています。

保育研修では 2 歳児が嫌いな食材を頑張って完食していることにビックリ。

「村のお母さんは子どもが嫌いな食べ物あげません。でもこれ良くないですよ。嫌いだけ少しずつ食べる、いいですよ。」

リンダさん自身、多くの好き嫌いがあるので、これを機に少しずつ食べているようです。



リンダさんの研修したいこと

保育・就学前教育

村の農民は一日中忙しくしているため、幼い子どもの世話が難しい。場合によっては子どもをほったらかしのこともある。日本で保育を学び、村の保育状況を改善したい。また就学前の子どもたちにとって必要な教育について学びたい。

栄養

住民主体の健康診断でボランティアしている。主に子どもの体重測定を担当。炭水化物の取りすぎで太り、栄養のバランスが悪い子どもが多い。小学校の子どもたちへの食事を提供しているので、栄養について学び、そのことで村を啓発したい。

保健衛生

子どもたちが体の清潔を保てない。特に手洗いが不十分であるのに手で食事するので不衛生。基本的な保健衛生を学び、村人たちに伝えていきたい。

洋裁

過去の PHD 研修生たちが洋裁工房を立ち上げた。洋裁を基礎から学び、元研修生たちと活動を広げていきたい。



滞在家族 /

葛原時寛さん、香織さん

家の中がすごく明るくなりました。休みになると、「今日はどこ行く?」「スーパー行きますか?」と朝 7 時頃から、ずっとしゃべり続けてです。

リンダさんは 1 週間に 1 度、すべてのものにアイロンをかけます。「シャツ、パジャマ…。アイロンはリンダの部屋に持って行ったままなので、こちらの衣類のアイロンもお願いしています。きれい好きでお掃除は言わなくてもあちこち掃除してくれます。

保健衛生に興味があるので、それならまずは「好き嫌いをしないこと」と教える毎日です。

PHD 協会のネパール大地震被災者支援にご寄付をお願いします。

大地震からの復興に、皆様のご支援が必要です。何卒、ご協力のほどお願いいたします。

ご寄付の方法

ゆうちょ銀行

振替口座：01110-6-29688
口座名：公益財団法人 PHD 協会

三井住友銀行

支店名：神戸営業部
口座：普通
口座番号：3210568
口座名：公益財団法人 PHD 協会

クレジット決済

HP からお手続き下さい。
<http://www.phd-kobe.org/phd-kaihi.html>



PH 34期生研修生紹介

スリザナ・シャハ・タクリ

ネパール / 20歳

バスが通る幹線道路から4時間山を登った先にあるラジャバス村から最初の研修生です。父親が15歳の時に他界したので奨学金を得ながら高校に通い、卒業試験の直前にネパール大地震が発生。父親が残してくれた家は倒壊し、家族は今もタンの仮設住宅での暮らしを強いられています。唯一の収入源が水牛のミルク販売。弟妹の学費を賄うため、水牛の世話に追われる毎日です。

スリザナさんは大変勉強熱心で、日本語研修期間中はホスト宅に帰ってからも、日本のラジオを聴くなど遅くまで勉強。漢字も学習し始め、更にパソコンを学びたいということで時間を見つけてはタイピングの練習をしています。



スリザナさんの研修したいこと

保健衛生

村にはヘルスポスト(簡易的な医療施設)があるが、十分に機能していない。よって公衆衛生、生活習慣病、病気の予防について学びたい。具体的には風邪などの感染症予防や、加齢による足腰などの弱みへの対応や予防について学び、村人たちの健康につなげたい。また化学調味料など体に良くないとされる食べ物について知識を得たい。

応急手当

ケガを治療できる医療施設まで歩いて約4時間かかる。怪我人がその医療施設に到着するまでの応急手当を学び、自ら手当をするだけでなく、村の人たちにも広めることに努めたい。

保育・就学前・初等教育

小さい子どもたちへの教育について学びたい。日本の教育現場を見学し参考にしたい。小さい子どもたちに詩の朗読をするなど、6か月間ほど先生のアシスタントをしていた経験がある。

農業

村の畑ではトウモロコシ、豆、大根、玉ねぎ、ニンニクなど栽培している。家畜は水牛と鶏。水が少ないため、米作には適さない。化学肥料や農薬は少し使う。よって有機農業を学びたい。



滞在家族 / 宝田和正さん、てるみさん

家が明るくなり、私たちの生活も向上しました。食事は完食してくれるのでうれしいです。特に食事のマナーを大切にしています。私のバースディプレゼントをもらい嬉しかったです。家族のように何でもお手伝いしてもらっています。

日本人はお金持ちとされていてますが、大切に考えながら使っていることを伝えたいです。

ティダチョー (マーチョ)

ミャンマー / 24歳

多くの研修生を招へいしてきたタダインシェ村の中でも最も僻地とされるウーインリー地区から初めての研修生マーチョさん。電気やガスはもちろんのこと、保育園や診療所などもない地域です。経済的な理由から大学に進学ができず、代わりに洋裁の専門学校に通いました。今では村の唯一の仕立屋として、子どもたちの制服から結婚衣装まで地域の人々の服を作り、家計を支えています。また高校時代からモーママさん(13年度)と親しく、一緒に各地で様々な啓発活動やボランティア活動に行っていました。周りをよく見、職員に気を配り、研修生たちの頼れるお姉さんの存在です。



ティダチョーさんの研修したいこと

ミャンマーの料理は油を多く使用するため、村人で高血圧に悩む人が多い。高血圧の仕組みを学び、村の人たちに伝えたい。また、少量の油でもミャンマー人にも受け入れられる調理法などについて考察したい。

保健衛生

ボランティアグループで、下痢などの病気を防ぐために、衛生的な飲み水や手洗いの重要性を地域住民に啓発した。村人の病気を防ぐため、保健衛生を学びたい。

洋裁

仕立て屋として、ミャンマーの伝統的な衣類は縫えるが、学校の制服は縫えない。町まで行かないと制服を作ることができない子どもたちのためにも、村で洋服が仕立てられるように、日本の洋裁を勉強したい。

ゴミ問題、環境問題

村の人たちはゴミを簡単にどこにでも捨ててしまい、捨てる場所を守らない。日本のゴミ処理や環境問題について学び、村の人たちに教えたい。

PH 34期生研修生紹介



滞在家族 / 黒野美代子さん

子どものいない私にとって、実の娘ができたようで毎日楽しく過ごさせていただいています。ミャンマーでも料理をされていたということで、休みの日には、ミャンマー料理を作ってくれることもあります。

お米を食べる量が、私以上に少ないので、遠慮しているかと思ったのですが、ミャンマーでも食生活の勉強をしていたようで野菜をしっかり食べています。



新人職員紹介



八木 純二

広報・啓発担当

広報・啓発担当新職員の八木です。PHD協会に入職する前も、国際協力NGOで広報を担当しておりました。とはいえ3年ほどのNGO広報としての業務経験、まだまだ勉強することが多いと感じています。

ついでに白状してしまうと、アジア・太平洋地域に対する知見がほとんどありません。韓国や台湾へも行ったことが無く、日本から一番近い国への渡航経験が、中東のヨルダン王国という有様です。しかし、研修生と過ごす日常を通して、アジアの文化に属する人々の考えに触れ、思いの一端を知ることができる、この仕事に新鮮な喜

びを感じています。今は、早く現地に渡航し、日本の属するアジア・太平洋地域を深く知り、岩村昇先生や先達が30年以上に渡って育ててきたPHD協会の哲学について理解したいと願っています。

いろいろ未経験を強調してしまいましたが、今年本厄41歳、初ことは微塵もありません。がんばります。

他己紹介 今里 拓哉

オモロイ方、来てくれました！その名も八木純二41歳。最年長だからか、世代間のことよく語ります。でも中身は若く、巷の流行も語ります。話は若干長めです。独り言も多めです。音声対応ウィキペディアならぬヤギペディアです。

実は広報のエキスパートです。PHDのチラシを見違えるほど変えてくれました。SNSもお詳しいです。FacebookだけでなくInstagramとやらをも導入。PHDを今風？なNGOに変えてしまうかもしれません。PHDを新しいステージに導いてくれそうです。

2016年度国内研修生紹介



加藤 志歩

広報・啓発担当

はじめまして！今年の国内研修生の加藤志歩です。普段は大阪女学院大学に通う4年生です。大学では国際協力について勉強しています。

私が今回国内研修生に応募した理由は、去年の夏ミャンマースタディーツアーに参加し、PHD協会の活動についてもっと知りたいと思ったことと、将来国際協力の現場で働くために、組織運営や事務所内の業務などについても勉強したいと思ったからです。

私は啓発担当ですが、海外の研修生と色々な場所でたくさんの人と出会い、一緒

に研修にも参加しようと思っています。そして1年間の経験を通して人間的にも成長していきたいと思っています。1年間よろしくお願いします！

他己紹介 八木 純二

アンニュイな風を身にまとい、たずむ加藤さん。なんとなくご機嫌が麗しくないのかな、と思ってしまうが、意外とそうでもないらしい。頼んだことには一つ返事で引き受けてくれる、大変ありがたい存在。

今年1年、PHD協会で様々なことを学び成長されると思います。シンプルに応援してます。

上石 景子

総務・財務・ファンドレイジング担当



4月からPHD協会でお世話になっております上石といいます。今年3月に名古屋の大学院を卒業し、PHDへの就職が決まり神戸へ引っ越してきました。

大学院在学中はインドネシアに1年間留学し、インドネシアの言語や文化を学ぶ一方、現地のジェンダーをテーマに研究をしていました。

PHDを知ったのは、大学院の教授にPHDの求人情報を教えてもらい、説明会に行ったことがきっかけでした。もともと国際協力に興味があり、学生時代はボランティア団体で活動したりスタディーツアーに参加し

ていたので、NGO団体の話を聞けたらいいなという程度でしたし、当初は博士課程に進み研究に専念しようと考えていました。それが、説明会に参加しPHDの話聞いて、正直でオープンな職場だと感じ、ここで働きたいと一念発起しました。そして、急ぎよ引越しと就職を決意するに至った次第です。

これからお世話になりますが、どうぞよろしくお願いたします。PHD事務所にいらした際にはぜひお話をさせていただけたらと思います。

他己紹介 坂西 卓郎

前任者井上に負けず劣らずの武勇伝持ち。スカイダイビング、ビリギャル、公認会計士、南山大学、インドネシア国費留学、酒好き、けいこスペシャル等など、数々のエピソードに彩られた期待の新人。

新卒なのにいつも「うふふ」と余裕な感じで仕事をこなすなど大器の片鱗を感じさせるが、その実、毎日いっぱいばいばいで仕事していると本人談。そうは見えないが、ともかく頑張り屋で体力がある。皆様暖かく今後の成長を見守ってやってください。

大倉 梨花

研修担当

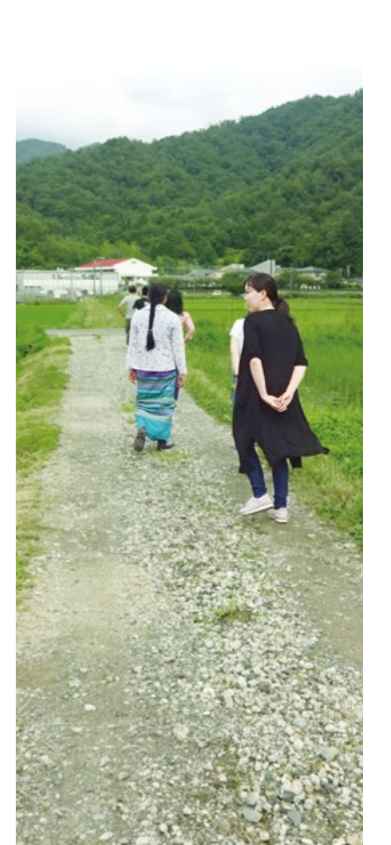


2016年度国内研修生として学ばせていただくことになりました、大倉梨花と申します。これから一年間、どうぞよろしくお願い致します。

私は今年の3月に大学院を卒業し、将来国際協力について働きたい国内研修生としてに応募しました。海外研修生の皆と保育や有機農業などを学び、彼女たちの視点から日本の社会問題について考えていきたいです。同時に自らの半生を振り返り、これからの方向性についても考えていきたいです。一年間よろしくお願致します！

他己紹介 今里 拓哉

アメリカ育ちで修士修了。大手企業でもNGOでも引く手数多だったはずだが、新卒の特権を棒に振り、国内研修生になってくれた大倉さん。大変献身的に研修生たちをサポートしてくれます。とても優しいので振り回されてはオロオロする時も見受けられます。でもどこか楽しそう。研修生と一緒に保育研修にも農業研修にも果敢に挑みます。実りある一年になるよう一緒に取り組んでいきましょう。



2016 年度 事業方針・計画

方針

今年度は「ネパール大地震復興支援の第二段階」、「事務局の土台作り」の二つをテーマに行います。

ネパールは緊急支援から復興支援の段階に入り、今年は「子ども」と「収入向上」をテーマに（詳細はP.3）。また事務局職員の交代を受け、既存事業の安定的実施と基盤づくりを中心にいきます。また自主事業としてスタディツアーにも力を入れていきます。

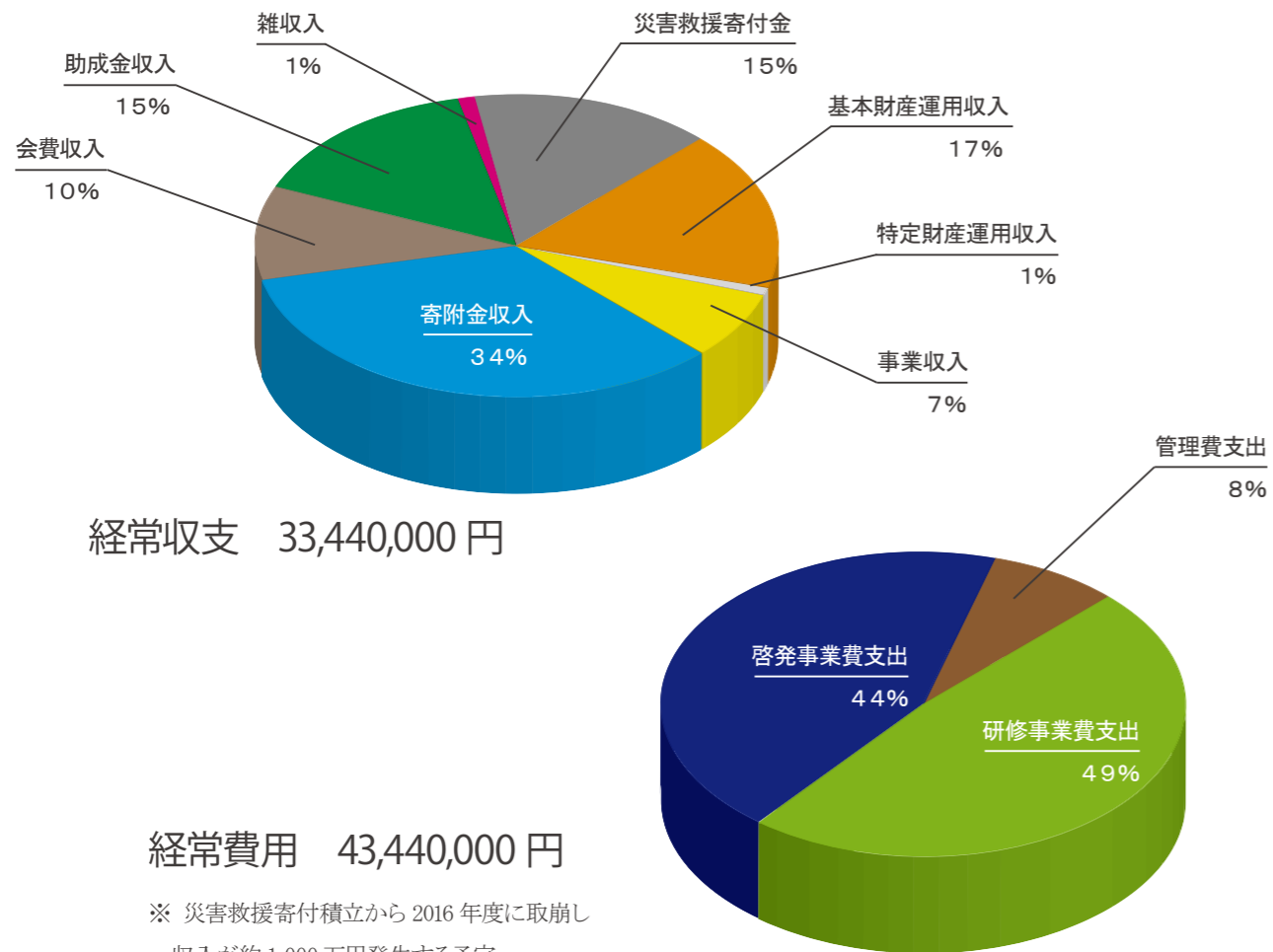
研修事業

34期研修生が3人も女性ということから、今年度は例年に比べて農業研修は少なく、保育や保健衛生そして洋裁研修の割合が多くなる予定です。また各地で自然災害が頻発していることを受け、これまで以上に防災・減災研修に重点を置き、大学との共同研修の計画を進めています。

広報・啓発事業

今年度はFacebookページの開設を行い、ソーシャルネットワーキングサービスを活用した広報・啓発事業を一層進めます。また、会報やその他の印刷物のリニューアルも随時行っていきます。こうしたメディアを、より活用した広報・啓発事業を展開することによって、新しい支援者の掘り起こしを図ります。

2016 年度 予算



PHD 活動紹介 2016年3月～6月

3月

- 1日 PHD 協会 評議員会
- 2日 JANIC シナジー用取材 (坂西)
- 6日 ローターリー米山記念奨学会歓送会 (井上・33期研修生3名)
- 5日 33期研修生帰国報告会
- 9-17日 インドネシア比較研修旅行 (坂西・今里・中川・33期研修生3名)
- 9日 33期研修生離日
- 16日 NGO-JICA 協議会 (中西)
- 24日 コープともしびボランティア振興財団 理事会 (坂西)
JANIC 研修ニーズ調査の会 (坂西)
- 26日 芳田、井上送別会
- 27-4/3日 ミャンマー出張 (坂西)



インドネシア比較研修旅行：短期研修生アイニスマイルさん（中央）が校長を務める小学校を訪問。

4月

- 8日 34期研修生来日
- 9日 加東市退職女子教職員の会 講演 (坂西・上石)
日本語復習ボランティア説明会 (今里・八木)
- 10日 ローターリー米山記念奨学生 オリエンテーション (坂西・今里・上石・研修生3名)
- 14-15日 アユス合宿 参加 (上石)
- 20日 国際友の会 説明会 (八木)
多文化共生のための国際理解・開発教育セミナー実行委員会 (坂西・上石・中西)
- 22日 熊本被災者支援として靴下約5,400足を送付
- 23日 34期研修生シェアリング
ソディ例会 (上石・八木)
- 24日 熊本地震被災地支援街頭募金共同実施・大阪梅田 (坂西・八木・上石・研修生3名)
- 26日 国内研修生オリエンテーション (坂西・今里・八木)
- 27日 大阪女学院大学ミャンマー・スタディツアー説明会 (今里)
- 28日 定例職員会議
- 29日 ローターリー2680地区協議会 (坂西・スリザナ)



研修生シェアリング：研修生が来日した経緯やこれまでの人生を翻訳ボランティアを介しながら、お互いに共有する。

5月

- 1日 後藤監事宅留学生交流会 参加 (坂西・上石・研修生3名)
- 7日 ナマステ総会 参加 (今里・大倉・加藤・研修生3名)
- 9日 CSネットワークフォーラム運営委員会 (坂西)
- 10日 コープともしび振興財団インタビュー (坂西)
“ネパール大地震復興支援チームひょうご（仮称）”の設立・被災地調査・支援報告会 参加 (坂西)
- 11日 関西 NGO 協議会 理事会 (坂西)
- 12日 漫画家松田氏、研修生の似顔絵作成
- 14日 ソディ例会 (上石・八木)
- 17日 神戸市シルバーカレッジ 講義 (坂西・大倉・研修生3名)
- 20日 PHD 協会 2015年度業務監査 (坂西・上石)
- 23日 NPO/NGOの組織基盤強化のためのワークショップ 参加 (上石)
- 24日 PHD 協会 理事会
- 26日 NGO-JICA CDN会議 参加 (坂西)
- 27日 コープともしびボランティア振興財団 理事会 (坂西)
PHD 協会 西脇指導者会 (坂西・今里・上石・八木・研修生3名)
- 29日 青年海外協力隊兵庫OB会総会 参加 (坂西)
- 31日 愛媛県生涯学習センター富吉氏、岩村昇博士協力会田中氏来訪 (坂西)
定例職員会議



神戸市シルバーカレッジでの講義：職員と研修生が、村の様子や現地事情を話す。



NGO相談員会議：外務省にて全国のNGO相談員制度受託団体が一同に介して、今後の制度の在り方について話し合われた。

6月

6月

- 1日 コープこうべ吉田氏、岩切氏打ち合わせ (坂西・今里)
- 2日 神戸 NGO 協議会 (坂西・上石・今里・大倉・加藤)
- 5日 34期研修生来日報告
- 6日 NGO-JICA 協議会 CDN 会議 (坂西)
- 7日 NGO相談員近畿ブロック会議 (坂西・上石)
阪神シニアカレッジ 講義 (坂西・研修生3人)
- 11日 市民活動センター神戸総会 (坂西)
- 14日 PHD 協会 評議員会

- 15日 神戸市シルバーカレッジ
ジョイラックデー バザー (八木・加藤)
コープこうべ総代会 参加 (坂西)
- 18日 スタディツアー合同説明会
(八木・大倉・加藤)、NGO相談員 (坂西・上石)
- 20日 大阪女学院大学院生 NGO 訪問、受入 (今里・研修生3名)
- 23-24日 平成28年度 NGO相談員連絡会議 (坂西)
- 24日 NGO-JICA 協議会 参加 (坂西)
- 28日 神戸市民活動協議会 (HYOGON) 総会 参加 (坂西)
定例職員会議
大阪 YMCA・IHS インターン打ち合わせ (坂西、八木)

ロータリー米山記念奨学会

2016年度も米山記念奨学生として受け入れていただきました！

上石 景子=文

篠山ロータリークラブでは、昨年度と同様にインドネシア出身の研修生を受け入れていただいております。今年度の研修生のリンダさんには名刺を作っていただき、彼女は嬉しそうにクラブの皆さんに配っていました。また、7月に予定されている納涼例会にお誘いいただき、初めてのクルージングをとっても楽しみにしているようです。

小野加東ロータリークラブには、今年度初めて PHD 研修生を受け入れていただきました。初めての研修生はネパール出身のスリザナさん。彼女が参加した初めての例会では、自己紹介に「日本に来てびっくりしたことは天ぷら」と話し、笑いを誘いました。8月の小野祭りに参加させていただくこととなり、浴衣を着てみたいとわくわくしています。

川西ロータリークラブでは例年、ミャンマーからの研修生を迎えていただいております。今年度もミャンマー出身のティダチョーさんがお世話になっております。マーチョさんという愛称で呼んでもらい、過去の研修生の話などでいつも盛り上がっています。

◇今年度のお世話クラブとカウンセラーの方々◇

篠山ロータリークラブ・山内利樹さん
リンダさん

小野加東ロータリークラブ・柳田吉亮さん
スリザナさん

川西ロータリークラブ・加藤仁哉さん
ティダチョーさん（マーチョさん）

右/篠山ロータリークラブ
左下/小野加東ロータリークラブ
右下/川西ロータリークラブ



日々是 東奔西走

研修担当
今里拓哉

ODAによる開発 プロジェクト地を訪問

2016年3月にカンチ、サンティダ、ゾンの33期研修生たちと一緒にインドネシアのスマトラ島に位置するコトパンジャン地域を訪問してきました。ここは今から20

年前に日本のODA約312億円が円借款され、水力発電ダムが建設された場所です。ダムが建設されれば、その上流にダム湖ができます。その面積は124平方km、大阪のJR環状線の約4倍。11の村々がダム湖に沈み、約5千世帯、2万3千人が先祖代々受け継いできた家や農地を奪われ移住することを強いられました。

国による補償は？

「移転住民の生活水準は移転以前と同等かそれ以上のものが確保されること」

上記は当時インドネシア政府と日本政府が交わした円借款の条件の一つです。「希望の村」とも呼ばれていたかつての緑豊かなコトパンジャン地域。移住地での暮らしはどのようなのでしょうか？ 次は私たちが現地で見聞きした一部です。



11の村が沈むダム湖の上で

- ・ 代替住居は小さく粗末。また屋根にはアスベストが使用されている。
- ・ 井戸はすぐ枯渇したので飲み水は雨水。
- ・ かつての村では米、ゴム、果物など多くの農作物を栽培できた。移住先では収穫可能なゴム園が用意される約束であったが、実際は苗すらなく、デモによる訴えて、なんとか苗を獲得した。収穫できるまで4年以上の間は生活が成り立たないので、移住先を去る人々が後を絶たない。
- ・ 一つの村が3つの移住先に分断され、親族やコミュニティがバラバラになった。
- ・ 移住先には病院や中学校がない。
- ・ 移住先の村で育った世代に伝統文化が受け継がれない。経済面だけでなく、アイデンティティの欠落による精神的な不安定さが若い世代に漂う。



コトパンジャンダム



移住先住居はヤギ小屋と椰輪されるほど粗末

誰のための開発？誰の責任？

「ダムは街の人のためには少しはいい。しかし村の人たちには全然よくないです。どうして日本人はこのこと考えないか？」サンティダさんの感想の一部です。多くのPHD研修生たちの出身地域タランバングは、ここからそう遠くありません。

社会貢献の「うつわ」としてのPHD

熊本地震とPHD協会

2016年4月14日(M6.5)と続く16日(M7.3)に、大きな地震が熊本県を中心とする九州地方に発生しました。熊本は研修先として、ゆかりのある地。PHD協会として何かできるのか考えました。

八木 純二=文

西日本研修旅行の研修地として、また連携する団体が活動する地域としても、PHD協会にとって、熊本は縁の深い土地。関係者の安否報告や報道を通じ、現地の被害を知るに連れて職員一同大きな衝撃を受けました。また、PHD協会の支援者の方々から団体としてのアクションが無いのか問い合わせもありました。

しかし、PHD協会はアジア・太平洋地域の村々から研修生を受け入れる草の根交流をする団体。研修生が被災したため、ネパール大地震被災者支援に大きく関わってはいますが、現在の職員にとっては新しい試みであり、ましてや国内の緊急災害支援ができる力はありません。一方で、日本の皆さんに支援を受けてネパールの被災者支援を行う団体として、そして阪神淡路大震災の記憶を持つ団体として、何かできるはことないのか、という思いがありました。

そんな折、研修先である熊本県水俣市の「水俣病センター相思社」



左/4月22日 相思社への靴下発送
右/4月24日 大阪・梅田での街頭募金

より、支援物資提供の要請があり、「靴下」の不足が伝えられました。偶然にも、PHD協会では支援者の方からいただいた大量の靴下を保有しており、職員総出で5,400足もの靴下を被災地に発送しました。

4月24日には、「社会を動かす研究所」と協働で、大阪・梅田において街頭募金を行うことになりました。当日は呼びかけに賛同した有志の皆さんとPHD協会職員及び研修生が街頭に立ち、3時間余りの活動で、総額198,852円もの募金を集めることができました。

支援物資の発送も街頭募金も、PHD協会が独自で動いたものではありません。しかし、結果的にこれらの活動を実行できたのは、多くの人々の「この社会に貢献したい」という思いを受け止める「うつわ」として、PHD協会が機能しているからだと考えます。支援者、連携する団体、そして研修生と職員。今後もPHD協会は様々な人々の思いを受け止める、大きな「うつわ」であろうと思います。

フェアトレード商品の紹介

上石 景子=文



上/インドネシア・スマトラ島タベ村の洋裁工房製カードケース。
下/タイ・カレンの手織り布製品。



4月から退職された芳田さんの業務を引き継ぎ、わたくし上石がフェアトレード担当となりました。

PHD協会では、タイ・カレンの元研修生が製造している草木染め製品を扱っており、タイ・スタディツアーの際にメーサリアンとムシキーという村で毎年仕入れています。商品はポーチやバッグ、ランチョンマット、コースターなど、多様です。加えて、ネパールのウール製品(手袋、靴下など)やミャンマーのTシャツ、ネパール災害救援事業の一環として、現地フェアトレード団体「マハグティ」より仕入れた商品(スカーフ、お香など)なども販売しています。そして、今年から新たにインドネシア・スマトラ島タベ村のカードケースが加わりました。タベ村ではPHD協会の元研修生たちが洋裁工房を立ち上げ、売れる商品の開発に試行錯誤しています。その商品化第一弾がカードケースということで、模様や柄の種類がたくさんあり、どれもエスニックで可愛いく仕上がっています。

事務所に遊びに来て、ぜひPHD商会のフェアトレード商品を手にとり、見ていただけたらと思います。

外務省 NGO 相談員
国際協力エッセイコンテスト 2016



今年のテーマは国際協力に興味を持った「あの時、あの瞬間」
初めて国際協力に興味を持ったのはいつですか？
原点は十人十色。
あなたにとっての国際協力の原点をエッセイに。



- ・募集期間 2016年6月15日～10月30日(必着)
- ・募集テーマ 国際協力に興味を持った「あの時、あの瞬間」
- ・対象 大学生
- ・応募規定 形式自由、1600字以内。応募作に氏名、題名、学校名、学年を明記。
- ・最優秀賞 インドネシア・スタディツアー往復航空券(2016年3月中旬ツアー実施予定)
- ・ご応募 お問い合わせ先 公益財団法人 PHD 協会「NGO 相談員エッセイコンテスト 2016」係
* 詳しくは当会ホームページをご覧ください。 <http://www.phd-kobe.org/>

法人会員制度始めました

7月1日より、法人会員制度を開始しました。PHD 協会は2016年1月1日より、寄付に対しての控除の認可を受け、御法人でも損金算入していただけます。是非、ご検討ください。

皆様の会費は研修生の研修費用の他、今後のネパール大地震の復興支援活動にも使用させていただきます。

PHD 協会の法人会員制度に関する詳細は、当会まで電話またはメールでお問い合わせください。

電話 : 078-414-7750

e-mail : info@phd-kobe.org

夏 PHD 2016年 スタディツアー **第29回 インドネシア・スタディツアー**

元 PHD 研修生が活躍中！ 住民主体で進む開発の現場を見てみませんか？

日程：9月10日午前 関西空港集合 ～ 9月18日早朝 関西空港着

参加費：192,000円 定員：13名

日本で研修を受けた研修生達がチームを作り地域で活躍しているインドネシア。帰国後、水道や学校、幼稚園を作り、地域に貢献しています。そんな元研修生達の家にホームステイをして、村の生活を満喫できます。インドネシアの村で濃い時間、暖かい人たちに出会う旅に出かけませんか？



* 詳しくは当会ホームページをご覧ください。
<http://www.phd-kobe.org/tour-indonesia.html>

参加者募集中 !!



手順1: Facebook にログインしたら「PHD 協会」と検索



手順2: PHD 協会の Facebook ページに到着、

「いいね!」をクリック! ● ● ● ● ●



新入職員を迎えての一言
新入職員入職しての一言

〇月×日の PHD 協会

職員 八木 提案が通りやすい職場。後からひっくり返されないのが〇。だからと言って常に仕事が捗っている訳でもない。

職員 上石 PHD の人はスーツが苦手。「社会人ってスーツじゃないの？」と新卒の私はびっくり。でも、スーツを着ると緊張する性質なのでホッと一安心。

職員 坂西 大胆不敵の上石、お茶目キャラの八木。年の離れた同期で大丈夫？と心配していたが、杞憂に終わる。八木を軽くあしらう上石が最近のツボ。

職員 今里 研修生の食べ残し処理は研修担当の重責。そこに救世主現る。「いける？」と聞くと「もちろん」と片っ端から食べる上石。末永くよろしく。

職員 中西 「悪霊退散」と叫びながら目が覚めたという八木さん。「そういうことないですか？」と聞かれたが、ある訳ない。ユニークな人だなあ。

職員 古寺 新卒ながら NGO の多種多様な仕事をテキパキこなす上石。感嘆したのは笑顔で上司に締め切りを守らせる技。むしろ熟練。末恐ろしい。

以上、早く家に帰ろうよ、順

編集協力：桃骨